

郷土博物館・文学館だより

第9回 渋谷現代短歌募集 優秀作・佳作発表

渋谷には、明治時代から現在に至るまで、多くの文学者が住み、近代短歌の発展に貢献してきた雑誌『明星』や『アララギ』も渋谷で発行されました。当館では、こうした渋谷の文学風土を継承し、区民をはじめ多くの方々に渋谷を再発見していただく機会として、年に一度、「渋谷」を題材にした短歌を募集しています。

9回目を迎えた平成20年度は、30名から113首が寄せられました。この中から優秀作5首、佳作5首が選ばれ、作品を書写した色紙は、当館と渋谷区役所中央エレベータ前ホールに展示されました。

5月8日には当館で表彰式が行われました。表彰者からは、文学講座「短歌をつくろう」で経験を積んだ結果が、良い作品につながった

という感想が数多く聞かれました。

平成21年度も10月から歌の実作を中心とした同講座を開講します。より多くの方の講座参加と「第10回渋谷現代短歌募集」への応募を期待しています。



表彰式に出席された入選者の皆さん

第九回渋谷現代短歌く優秀作・佳作く

元聖徳大学教授 逸見久美選

〔優秀作〕

メキシコで発見されし大壁画

太郎の神話渋谷へ来たり (大久保好夫)

今日も散る与謝野晶子の見し銀杏

きらりとひらりと参宮の森 (功刀 國子)

渋谷川護岸されたる川辺にも

都会育ちのセキレイ遊ぶ (竹内 貞雄)

片思いの君が無邪気に微笑めば

千駄ヶ谷の風イチョウを揺らす (根本 孝治)

ひねもすの雨には寂し青山の

通りにながく本を商う (米田 宏彦)

〔佳作〕

暮れなつむ代々木の空に飛行船

鯨(いきま)の顔してゆったり泳ぐ (大島 範子)

今日も来て憩う一時(ひととき)のベンチ
桜紅葉の代々木公園 (小林 綾子)

休日にハチ公バスで一巡り
隠れた渋谷発見楽し (関根 道子)

ビル風は渋谷駅前強く吹く

杖つく人の足元氣遣う(長岩 芳江)

いつまでも待つてばかりはいられない
ハチ公前からスイン坂へ (矢沢 百合)

渋谷に明治神宮ができるまで

来年鎮座 90 年を迎える明治神宮は、毎年初詣には多くの人が参拝しています。結婚式を挙げる人も多く、人々に親しまれている明治神宮は、どのような経緯で渋谷に建設されたのでしょうか。

明治 45 年（1912）7 月 30 日明治天皇が崩御すると、多くの国民が深く悲しみ、その陵墓を「東京に造ってほしい」との要望も出しましたが、すでに宮内省によって陵墓は京都伏見の地に決められていました。それならば、明治天皇奉祀の神宮建設をと、望む国民の声が高まり、これに応えた政府は、大正 2 年（1913）7 月天皇の御一年祭終了後、明治神宮創建の準備に入りました。

建設候補地としては、富士山など各地の聖地、霊地といわれるような場所のほか、天皇ゆかりの土地などがあげられましたが、大正 3 年 1 月、東京府下を鎮座地とすることが決定され、4 つの候補地にしぼられました。それらは、陸軍戸山学校（牛込区若葉町 22 万坪）、白銀火薬倉庫跡（芝区白金三光町 7 万 6417 坪）、青山練兵場跡地（赤坂区約 15 万 7000 坪）、そして南豊島御領地である東京府豊多摩郡代々幡村大字代々木（20 万 6399 坪）でした。

それぞれの候補地を審議した結果、戸山学校は樹木に乏しく、土地の起伏が激しいため、植樹や整備に莫大な費用を要するという問題がありました。また、白金火薬倉庫跡は、敷地が狭く、外苑を造ることが不可能であることが判りました。さらに、地形的な問題で、社殿は北向きとなり、そのような社殿は建築された例がほ

とんどないため、不相当とされました。青山練兵場跡は、中央線・山手線・市電などに近く、参拝者の便は良いものの、騒音が難点とされました。さらに樹木が少なく、練兵により踏み固められた土地は植物が育ち難いため、造営には莫大な費用を要するとされました。

南豊島御料地は、かつて明治天皇が行幸したことがあり、皇太后が好まれた場所でした。また、交通の便が良いにも関わらず、付近には民家が少ない静かな場所であり、敷地内には自然に湧き出す泉池があるなど、すでに神域と感じられるような別天地でもありました。さらに、この敷地は御料地であるため、建設に際し、土地を買い入れる必要がなく、樹齢を重ねた樹木も多く、建設費用の面でも建設地としては最適な場所でした。このような理由から、神宮の建設地は南豊島御料地が選ばれました。

大正 3 年（1914）には正式に内定し、翌 4 年より建設が始まり、大正 9 年に鎮座式がおこなわれました。

明治神宮ができると、全国から参拝者が訪れ、参道には出店ができるほど賑わったといえます。



明治神宮拝殿（戦前の絵葉書より）

田山花袋が暮らした代々木

「蒲団」「田舎教師」などの作品で知られる田山花袋は、明治4年（1871）に現在の群馬県館林で生まれました。早くから漢学などに親んできましたが、19年に一家で上京してからは江見水蔭に師事して文学を学び、詩や小説などを発表するようになります。そして29年、渋谷の国木田独歩の家で、はじめて独歩と出会います。このときの訪問は、花袋がのちに『東京の三十年』（大正6年刊行）で詳しく描いています。訪問の翌年に、花袋は独歩や松岡（柳田）国男・宮崎湖処子らと新体詩集『叙情詩』を刊行しています。

39年に博文館から『文章世界』が創刊されると、花袋はその主筆に就任し、自然主義文学運動を進めてゆきますが、この年に都心の牛込から東京市外の代々幡村山谷、現在の代々木三丁目付近に移り住みます。

代々木に居を構えてすぐの40年、『新小説』に「蒲団」を発表し、42年に『田舎教師』を刊行して、文壇に確固たる位置を築いてゆきます。しかし、明治末期にスバル派や白樺派文学が台頭しはじめ、自然主義文学がおされるようになると、花袋は博文館を退社します。そして、いとこの停滞もありましたが、大正期に入っても旺盛な創作活動を続けました。

花袋は、自宅付近を舞台にした小説「少女病」などを書いています。以前から力を入れていた紀行文にも代々木周辺のことを描いています。大正5年（1916）に実業之日本社から刊

行された『東京の近郊』には、「丘の西郊」の章の冒頭で、「先づ私の手近な西郊から始める」として、自宅から渋谷までの風景を描写しています。

花袋が暮らし始めた当時、代々木北東部付近は、東京近郊の農村から住宅地へと大きく変わりはじめていました。花袋は、代々木練兵場付近について、『東京の近郊』の中で「この練兵場の中には、私のよく歩く時分には、林があたり、川があたり、村落があたりしたところだ。独歩などもよく此处を歩いた。西郊の雑木林の美は他にもあるけれど、此处もすぐれたもの一つであった。しかし、今は一帯の平地になって了つていた」と述べています。

明治から昭和にかけての、代々木周辺の激しい移り変わりをしながら、昭和5年（1930）、花袋は代々木の自宅で生涯を終えました。



大正時代の代々木山谷

後方の台地上にはすでに家が建ち並んでいる

文化財紹介



(左から伽藍神・観音菩薩・達磨大師)

「木造観音菩薩坐像及び

達磨大師坐像・伽藍神倚像」

区指定有形文化財（非公開）

（平成20年度 新指定）吸江寺蔵

像高（観音） 43.1 cm

（達磨） 59.2 cm

（伽藍神） 60.7 cm

木造観音菩薩坐像及び達磨大師坐像・伽藍神倚像が、平成20年度に新たに区指定有形文化財となりました。

臨濟宗妙心寺派普光山吸江寺の所蔵にかかるもので、当山は板倉周防守重宗夫人戸田氏の帰依を受けた寺院として、慶安3年（1650）麻布桜田町に開創し、元禄14年（1701）に現在地に移転したと伝えられます。

本堂の壇上中央に観音菩薩坐像、左壇に達磨大師坐像、右壇に伽藍神倚像を配置する近世に定着した禅宗寺院における安置形式を踏襲しています。伽藍神には修理大権現菩薩をあてる例が多く、当寺の場合もその例となります。

観音菩薩坐像は、髪型や顔立ち、体形や着衣の構造技法に際立った特色を見せています。体形はブロックを重ねたように重苦しい特徴から鎌倉時代末期以降の院派仏師の作と考えられます。ただし、本像は簡略

に形式化を進めているあたり、室町時代も15世紀の作とみられます。

達磨大師坐像は、頭を衣で覆い、両手を腹前に組む定型ですが、椅子（曲象）に坐るさまで、着物を垂らしています。本像も、ブロック状の体形などから院派仏師の作風に通じる特色がみられ、観音像とほぼ同時期の作とみられます。

伽藍神倚像は禅宗寺院における伽藍の守護神で、中国宋代の道教神を祀る形式に基づいています。日本では、鎌倉時代に取り入れられています。達磨大師像と対をなす作例は、江戸時代に多くなります。本像は木寄せ法などの特徴から、安土桃山時代から江戸時代初期に下る頃の傾向を示しています。

このように、吸江寺の三躯は、開創期より一具の像として伝来したとみられ、禅宗寺院特有の尊像構成を示す貴重な作例です。

【今後の展示予定】

企画展「昭和40年代の渋谷写真展」

平成21年7月18日（土）～9月23日（水）

*昭和40年代の渋谷の写真を展示します。

企画展「いにしへの渋谷」

平成21年10月5日（火）

～平成22年1月11日（月）

*渋谷で出土した遺物を展示します。

特別展「渋谷の富士講」

平成21年1月23日（土）～3月22日（日）

*江戸～昭和の区内富士山信仰を紹介します。

白根記念

渋谷区郷土博物館・文学館

SHIBUYA FOLK AND LITERARY SHIRANE MEMORIAL MUSEUM

開館時間 ◆ 9:00～17:00（入館は16:30まで）

休館日 ◆ 月曜日（休日の場合はその直後の平日）・年末年始

入館料 ◆ 一般100円（80円） 小中学生50円（40円）

※ 10名以上の団体料全

※ 60歳以上の高齢者・障害のある方と付き添いの方は無料

お問い合わせ ◆ 東京都渋谷区東1丁目9-1 TEL.03-3486-2791

郷土博物館・文学館だより vol.11

平成21年8月1日発行